中国地区英語教育学会研究紀要No.12 (1982. 8. 1)

# Speaking の能力とその評価について－Fluency の観点から

広島大学大学院
萬　谷　隆　一

## はじめに

Speaking 能力の評価が困難である第一の原因は，その能力の構成要素が極めて複雑に絡み合い，評価すべき目標となる能力が規定しにくいためである。この「話せる」ということは，どういうことなのかを解明し，その評価方法を確立するための小さな試みとして，小論は，Speaking の能力の一つの下位区分としての fluency の概念を明らかにし，その評価方法を示唆する。

## 1　Fluency の概念

Fluency は，一般に外国語教育の究極目標として，また speaking の能力を測るテストの採点観点として，しばしば用いられる概念である。Madsen & Jones（①：7）は，市販のもの，実験の一部として使われたものを含めた Speaking の能力を測るテスト七十四種類を調査し，どのような採点観点が使われているかを探った。その結果，最も多く用いられていた観点は，Grammar（81％），次に Fluency（71％），以下 Vocabulary（67％），Pronunciation（66％），Appropriateness（63％），その他（37％）の順に多いことが明らかになった。もちろん，それぞれのテストにおける fluency の捉え方は，微妙に異るであろうが，このことから，fluency が，一般に speaking 能力における有力な構成要素の一つであることが分かる。

しかしながら，このように fluency という言葉が多用されてはいるが，その定義は，あいまいである。Ingram（②：78）は次のように述べている。

There has been a certain amount of not very fruitful dicussion in recent years about 'fluency' both from the teaching and the testing points of view. This is not surprising, for 'fluency' is not a defined term, it is just a label, giving a misleading impression of simplicity to that very complex thing, command of spoken language.

確かに，fluency という言葉は，使う人によって，少しづつ違った speaking の側面を意味し，まず明確にする必要がある。

Fluency についての一般的な一致点は，辞書的な意味ということになるであろう。*Webster's Third New International Dictionary of the English Language* (1966) によると，fluency は "versed in the use of language: ready with words . . . easy and flowing: pleasingly graceful." としている。つまり，「すらすらとよどみなく」言葉を使うことができるということであるが，これが具体的には，どのようなことを意味するのか明確ではなく，評価の基盤とはなり得ない。fluency の概念をより明確にするためには，精密な分析が必要である。

ここでは，Leeson（③），Crystal & Davy（④），Dalton & Hardcastle（⑤）の三者の fluency についての考え方を取り上げる。

1）　Leeson（③）

彼によると，fluency は次のように定義されている。"the ability of the speaker to produce

indefinitely many sentences conforming to the phonological, syntactical and semantic exigencies of a given natural language on the basis of a finite exposure to a finite corpus of that language. (p. 136)"。また，彼は，"... this multifaceted phenomenon is characterized by a multiplicity of performance levels, stemming not only from purely linguistic factors ... but influenced in large measure by extra-linguistic pressures exerted by the speaker-hearer's environment, personal characteristics and purposive goals. (p. 141)" と述べ，fluency に関わる factors は多く，複雑に関連し合っている点を強調している。Leeson の把える fluency は，言い換えるならば，言語習得能力をも含めた，言語能力全体を意味する概念であると言うことができる。

2) Crystal & Davy（④）

彼らによると，話者の発話は，"language which *initiates* the utterance"，"language which indicates that his utterance is *continuing*, not yet completed." "language which indicates that he has *finished* speaking." という三部分に分かれる。そして，fluency とは，二番目の部分における発話の continuity を指している。彼らは，informal な会話場面において，この continuity を保持するための方法として，言語学的視点から，5種類の connectives を挙げ，分析を試みている (pp. 86-107)。

a. *neutral connectives* (e.g. and ... and ... and)
b. *reinforcing or supplementing connectives* (e.g. in fact, in other words, for instance, etc.)
c. *diminishing connectives* (e.g. at least, or rather, etc.)
d. *softeners* (e.g. you know, I mean, sort of, you see.)

3) Dalton & Hardcastle（⑤）

彼らによると，外国語教育における fluency の概念に関与する factors は a) 音素，かぶせ音素，純語，語いの *accuracy* に関するものと，b) speech output の *temporal sequential* な面に関するものの二つに大別され，後者が強調されるとしている。b) に含まれる factors は，一定時間内にどれだけ情報を伝え得たかの指標となる発話量，言葉がどれだけ滑らかに出て来たかの指標となる repetition, pause などである。

英語教育における評価の立場から上記三者の考え方を検討してみる。まず，Leeson（③）が捉える fluency は，かなり広い領域を包括している。彼の定義する fluency は，それに関わる要因が複雑に相互関連し合って形成されるものとしている点で注目される。しかし，speaking 能力の評価の下位区分として fluency を捉えるには，あまりに定義が広すぎ，評価の実際にそぐわない。しかし，重要な指摘として注目できるのは，fluent であるためには，音・文法・語いの面で，目標言語の規則に従って話さなくてはならないという点である。このことは，後述する accuracy の問題とも大きく関連するが，学習者の発話の intelligibility が重要であることを示唆する。発話が intelligible であるということは，母国語話者がそれを聞いて何を意味するのか理解できるということであり，意志伝達が効果的であるということである。Fluent であるための前提条件として，意味が伝達できるということを強調しておきたい。

一方，Crystal & Davy（④）の fluency は，やや狭い概念であり，fluency を保つための要因の一つである connectives について，言語学的な分析を試みたにすぎない。しかし，この connectives は，学習者が英語を話す際の fluency に多少なりとも影響すると考えられ，fluency の評価において無視するわけにはいかない。

Dalton & Hardcastle（⑤）の意見で注目されるのは，fluency に関わる要因を，accuracy に属するものと temporal・sequential なものに分けて考えている点である。母国語話者が，

学習者の話しぶりが fluent であるか否か判断する際に中心となるのは，後者であり，前者は，特に音素やかぶせ音素の面で fluency に密接に関係してくることは否定できないが，むしろ二次的であると思われる。

以上のことから，小論では，意味の伝達を前提として，そして fluency と accuracy との間に明確な境界線を引くことはできないことを認識した上で，fluency を speech out put の temporal・sequential な面に関する概念であると規定したい。

## 3 fluency 評価の実際

さて，以上の設定に従って，実際の評価を行うわけだが，temporal・sequential な面が具体的に何を意味するのか明確にしなければ，実際の評価の役に立たない。以下の四点を考慮する必要があると思われる。

1) 一定時間内の発話量

最も一般的なものは，一分間の語数 (WPM) であり，他に一秒間のシラブル数，一定時間内の proposition (clause) 数などがある。筆者の実験（Yorozuya ⑥）では，10人の大学生にあるマンガを英語で説明させ，その録音をとり，母国語話者に fluency の評価をさせたところ，W.P.M. と fluency は，.85（P.<.01）の相関があった。発話量は，fluency のかなりの部分を占めていると考えることができる。

2) Hesitation Pauses

Leeson（③：76）が強調するように，Hesitation Pauses は，fluency 評価の重要な指標となり得る。実際に，学習者に英語を話させてみると，意外に silence や言いよどみが多いことが分かる。上記の実験では，被験者の発話全体の50.2％が 0.5 秒以上の沈黙又は Hesitation noise で占められること，そして母国語話者の fluency の評価と発話全体における 0.5 秒以上の Hesitation Pauses が占める割合との間には−.78（P.<.01）の相関があること，が合かった。しかし，Hesitation Pause の文中における位置によって，どの程度 fluency が阻害されるのかについては，Goldman-Eisler（⑦：13）を除いては研究が少なく，不明な点が多い。

3) Repetition と False Starts

これらも fluency に含まれると考えられる。話す際に適切な単語が思い浮かばないために直前の単語を繰り返す場合や言い直しをする場合は，言葉の流れが途切れ，fluency が阻害される。

4) Connectives

Crystal & Davy（④）の Connectives は，fluency 評価の指標となり得るであろうが，これについても不明な点が多い。例えば，彼らは四種類の connectives を挙げているが，それら全てが学習者の fluency に貢献することは考えられない。上記 d. の *softeners* の "you know" などは，多用すると逆に耳障りであろう。どの種類の connectives が，場合によって，どれだけ fluency に影響するかについての研究が必要である。

## 4 おわりに

小論では，speaking 能力の評価の一領域としての fluency を speech output の temporal・sequential な面として規定し，その評価方法について論じた。しかし，fluency が speaking 能力全体においていかに位置づけられるべきか，については掘り下げ得なかった。特に，fluency が accuracy, appropriateness といかなる関係にあるのかという点については，不明確であり，これを今後の課題としたい。

〔参考文献〕

1. Madsen, H. S. & R. L. Jones (1980) "A Survey of Oral Proficiency Tests: Phase II", Paper read at The Colloquium on Validation of Oral Proficiency Tests, March, San Francisco, Ca.
2. Elizabeth, I. (1968) "Attainment and Diagnostic Testing" in A. Davies (ed.) *Language Testing Symposium*, 70-97, OUP.
3. Leeson, T. (1975) *Fluency and Language Teaching*, London: Longman.
4. Crystal, D. and D. Davy (1975) *Advanced Conversarional English*, London: Longman.
5. Dalton, P. & W. J. Hardcastle (1977) *Disorders of Fluency and Their Effects on Communication*, London: Edward Arnold.
6. Yorozuya, R. (1982) *Evaluation of Oral Fluency in English as a Foreign Language*, a M. A. thesis, Hiroshima University.
7. Goldman-Eisler, F. (1968) *Psycholinguistics: Experiments in Spontaneous Speech*, London: Academic Press.